

「東京まではあと何歩」

四反田 凜太

登場人物

虻川早苗（20） 上京を目指すハタチ

奥貫佑真（20） ネットカフェで出会う青年

虻川夏子（50） 早苗の母

おじさん

ネットカフェ店員

コンビニの店員

食堂の店員

フロントスタッフ

チャラチャラした集団

雑誌を読む老人

ファミレスの店員

○車内・（朝）

高速道路を走っている真っ黒な軽自動車。後部座席で携帯をいじっている虻

川早苗（20）。

運転中の母、虻川夏子（50）がバック

ミラー越しに早苗の顔色を伺っている。

夏子「…ねえ、不安とかないの？（と、呆れた様子で）」

早苗、夏子の顔を見ず、携帯を見たまま。

早苗「ん？ 何に對して？」

夏子「それは…その、上京よ」

早苗「え、今どういう状況なの、あたし」

夏子「そっちの状況じゃなくて」

早苗「なにどゆこと」

夏子「上京。上京よ。上下左右の上に東京の京と

書いて」

早苗「京都の京の方が良いんじゃない？ 一文字目にあるワケだし」

夏子「（ため息をつき）ちよつとは感謝しな

さいよね。私に」

早苗「なんでよ」

夏子「色々してあげたじゃない」

早苗「色々って？」

夏子「（突然声を荒げ）ねえちよつとは真面目に
したらどうなの！」

早苗「ちゃんと運転してよ、事故とか嫌だし」

夏子「…」

早苗「…（と、何も言わない夏子に）ん？何黙
って…」

夏子「（少し考え）高速降りたら、そっからは自
分で行ってね」

早苗「はあ？」

○高速道路・料金所・（朝）

早苗の乗っている車が高速道路から出てくる。

○国道沿いの空き地・（朝）

早苗の乗っている車が停まる。

○車内・（朝）

車が停まり、早苗、困る。

夏子「降りなさい」

早苗「お願いだからアパートまで行ってよ」

夏子「良いから」

早苗「まだ東京じゃないでしょ？　ここ東

京？　どこよ」

夏子「どこか分からないからこそ、停めたのよ。

早く降りなさい」

早苗「えーいやいや」

夏子「あなた上京するのよ？　これからはあんな田

舎町じゃなくて、ちゃんとした都会ライフを

過ごすの。そんなんでどうするの」

早苗「どうもしないよ」

夏子「とにかく早く」

早苗「ええー（と、一面倒くさそうに）」

○国道沿いの空き地・（朝）

荷物を出した早苗。

車は何事もなかったかのように走り去る。

早苗「もー マジないわ」

○コンビニ・（朝）

お茶とおにぎりを買う早苗。

レジに持って行く。

店員「いらっしやいませ」

と、お茶とおにぎりをバーコードで読み取る

店員。

店員「三百二十円です」

早苗「あの、カード使えますか？」

店員「はい使えますよ」

早苗「これですが、大丈夫ですか？」

そう言って出したのは、ＱＵＯカード。店

員「あ…はい、大丈夫ですよ！」

早苗、すみません、と。

○同・駐車場・（朝）

出てくる早苗。

お茶を袋から取りだし、飲む。

早苗、なんとなくガラス越しに店内を

見て、先程の店員の顔を見る。

早苗「三百二十円くらい、現金で払えよって、思いま

したよね…（と、呟く）」

ガラスに映る自分の姿。

早苗「…上京したぜよ」

しかし、なんだか切なくなって、見るのを

やめる。

早苗「ん、待て…したの、これ。してないよね」

辺りを見渡すが、駐車場に停まっているのは

農家の軽トラばかり。

国道にも全然車が通らない。

早苗「どここれ…」

タイトル

○ネットカフェ・個室・（夜）

爆睡している早苗の大きないびきが店内に響き渡っている。

と、目覚め、よだれを手で拭く。

早苗「…ん、何時だ今」

スマホ画面を見ると、夜の九時。早苗

「え、マジで…」

と、ノックされ、え、と。

早苗「はい」

店員の声「申し訳ありません、他のお客様の方からいびきがうるさいのと、独り言が多いとのことで苦情が来てまして…」

早苗「あ、はい、すみません」

店員の声「本来あまりこういうことは言わないようになってるんですが、なんせかなり怒ってらっしゃったのでえ…。」

早苗「はいはい、分かりました。すみません」店員の声「恐れ入ります…」

早苗「こちらこそ…」

店員が遠ざかるのが、足音で分かる。

早苗「（申し訳ないな、と）」

すると、店内に響くおじさんの大声。

おじさんの声「（大声で）あん？ ちゃんと

あらかじめ注意しとけや！」

店員の声「申し訳ありませんでした！」

おじさんの声「こつちも客だぞ！」

店員の声「本当に申し訳ありません！」

早苗、それを聞いて。

早苗「ごめんなさい！」

と、個室から身を乗り出して、謝る。

おじさんの声「うるさいわあ！ 今から寝る

んじゃ！ 黙れ！」

店員の声「申し訳ありません！」

店員、早苗に、もう下がってて、と。

早苗、はい、と引っ込む。

早苗「…」

落ち込み、そっと座り込む。

もたれかかった壁の向こうから、声が

する。

さつきとは対照的に、小声の気弱そうな男性の声。

男性の声「仕方ないですよね…いびきくらい」

早苗「え」

男性の声「あ、ごめんなさい」

早苗「…いや、大丈夫です。ですよね、いびきく

らい、許してほしいですよね」

男性の声「そうです。独り言も、自然と口から出るわけだし」

早苗「ですよね…ボーツとしてたら、出ちやいま

すよね」

男性の声「出ちやいます。そりやそうです。人間で

すもん」

早苗「絶対あのおじさんも、言ってますよね、独り言」

男性の声「独り言を黙らせる人の九割って、自分の

独り言に気づいてないバカです、バカ」

早苗「そうですよね、ありがとうございます」

男性の声「いや、お礼を言われるような…」

早苗「腹立ちました。だから、助かりました」

男性の声「そんなそんな、勝手に話しかけた

だけなんで」

早苗「…良い人ですね（と、笑って）」

男性の声「…自分、良い人なんて言われたことない

です」

早苗「じゃあ、ずっと悪い人だって言われてたんで

すか？」

男性の声「いや、うん…なんでもない人って、言われ

てたと思います」

早苗「…なんでもない人」

男性の声「はい」

早苗、なんとなく気になって、スマホ

を手に持ち、手だけ伸ばして、隣の個

室を隠し撮りする。

シャッター音を掻き消すように、わざ

とらしく咳き込む。

すぐにその写真を見てみる早苗。

個室の中には、物が散らかっているが、

誰も映っていない。

早苗「あれ！」

と、自分の個室の扉から覗き込んでる男性。

話していたのは、この人、奥貫佑真

(20)。

早苗「キャ！」

奥貫「撮りましたよね…」

早苗「あ、ごめんなさい」

奥貫「いや、大丈夫です、謝らないで」

早苗「…」

奥貫「そりゃ、気になりますよね。声の主はどん

な顔か、って…」

早苗「(顔を見て) ああ、イメージ通りです」

奥貫「どんなイメージしてたんですか？」

早苗「(奥貫の顔を指さし) こんなイメージです」

奥貫「(笑って)」

早苗「…あの」

奥貫「あの」

奥貫「え？」

早苗「ごめんなさい、先どうぞ」

奥貫「いえ、先に…」

早苗「あ、いや、ホントどうでも良いことなんで

すけど、いくつですか？」

奥貫「今年、二十歳です」

早苗「同じです！（大声で）」

その大声に、店員、何だろ、と覗く。

早苗、すみません、と。

奥貫「あなたも、二十歳ですか」

早苗「そうです。今年二十歳です。先月の一

日に二十歳になりました」

奥貫「自分、今月の四日です」

早苗「…おめでとうございます」

奥貫「おめでとうございます」

早苗「…二十歳の抱負は！（と、記者つぼくぶぎ

けてみる）」

奥貫「（苦笑し）この辺りですかご出身」

早苗「いえ…あの、どこですか、ここ」

奥貫「え？」

早苗「今日、上京予定だったんですけど」

奥貫「おめでとうございます」

早苗「でも、親と喧嘩して」

奥貫「あ、降ろされたんですか？　ここで」

早苗「はい（と、苦笑し）」

奥貫「それはそれは…ご愁傷様です」

早苗「はい、ホントですよ…あ、で？　あな

たは？　なんでしたっけ？」

奥貫「あ、いえ、ほんとどうでも良いことなんで」

早苗「それはあたしもなんで、なんですか？」

奥貫「…いや、やっぱりやめます」

早苗「なんですか」

奥貫「嫌な人だって思われたくないし」と、

自分の個室に入る奥貫。

早苗「思いませんよ」

早苗、壁から身を乗り出し、覗き込む。

早苗「なんですか…」

奥貫「いや…えっと、うん、あの、さっきの

文句言ってきたおじさん、どうです

か？」

早苗「どうって、腹立ちますよ。ちょっと前

の事ですけど、今でも腹立ちます。現在進行形ですよ。腹立ちングですよ

(と、笑って)

奥貫「…あ、じゃあ…」

奥貫、思い立ったように、置いてあった洗濯ばさみを手に取り。

奥貫「…どうですか」

早苗、どういう事か分からず戸惑うが、すぐに察して。

早苗「…ばれたらまずいんで、先にお会計だけ済ませますね」

○同・フロア・(夜)

荷物をまとめ、出てくる早苗と奥貫。

お会計へと急ぐ。

○同・レジ辺り・(夜)

お会計を済ませる早苗と奥貫。

店員「ありがとうございました」

早苗「どうも〜」

と、店員はバックヤードへと入って行く。

誰もフロアには出ていないのを確認して、奥

貫は早苗に洗濯ばさみを渡す。

早苗「…」

○同・フロア・（夜）

背伸びをしているため、不安定でフラ

フラしながら歩き、それぞれの個室を

見て、おじさんを探している早苗。

入り口付近で、それを心配そうに見つ

めている奥貫。

と、おじさんの個室を見つけた早苗。奥貫に、

あったよ、と。

うん、と奥貫。

早苗、寝ているのを確認して、そーっ

と扉を開ける。

奥貫、バックヤードから店員が出てきたのを

見つけて、やばい、と思い、店

員に駆け寄り。

奥貫「あ、あの…ここに、あー、えっと、このくらいの、えー、ピアス落ちてなかったですか？」

店員、ピアスをつけるような雰囲気ではない
奥貫を不審に思いながらも。

店員「ピ、ピアスですか？」

奥貫「はい」

奥貫がそんなことをしているとは知らずに、
そーつと扉を開けて、おじさんの個室に少し
入る早苗。

いびきをかいているおじさん。

早苗「お前もいびきかいてんじゃないか…（と、
呟く）」

そーつと、洗濯ばさみをおじさんを鼻
に挟む。

奥貫、店員に探してもらいながら。

奥貫「どこだろう（と、わざとらしく）」

店員「ないですね、申し訳ありません」

と、諦めようとする店員に。

奥貫「あ、ごめんなさい、そっちのレジの向

こう側かもお」

早苗、鼻に洗濯ばさみを挟んだおじさんが面白くて、笑いを堪えている。

そして、スマホを取りだし、写真を一枚撮る。

奥貫が頑張っているのを見て、戻ろうと立ち上がる。

その瞬間、足が壁に当たり、大きな音が。

おじさん、目を覚まし、早苗に気づき。おじ

さん「んう？」

自分の鼻に洗濯ばさみが挟まっているのに気づいて。

おじさん「…なにじゃこりゃ」

早苗「あ、いや…」

おじさん「は？ お前か？」

早苗「…いや、えっと、…ごめんなさい！」と、

途端に逃げていく早苗。

おじさん「待てコラ！」

おじさんも立ち上がり、追いかけてくる。

店員、え、と。

早苗、奥貫に目配せして、奥貫が開けた扉から出て行く二人。

騒然とする店内。

おじさん、追いかけてようと、走っていく。

何事か、と気になって個室から顔を覗かせた他の客。

それにぶつかり転ぶ、おじさん。

店員、すぐさまおじさんの方へ駆け寄ると、

今度は別の客とぶつかり、店員も転ぶ。

早苗と奥貫の姿はもうない。

○大通り・（夜）

走って逃げていく早苗と奥貫。

かなり走ってきて、辺りを見渡すと、誰もおらず、逃げ切った、と安心し、

走るのをやめる。

早苗「ああ〜」

奥貫「ああ〜」

早苗「いや、あれはヤバイ！ 笑い事になん

ないですよ！」

奥貫「ごめんなさい！」

早苗「いやもう命の危機！ やばかったです

よ！（と、笑って）」

奥貫「スッキリしました…？」

早苗「最高！ すんげえスッキリ！」

奥貫「それはそれは…（良かった、と）」

奥貫、自販機を見つけ、駆け寄り、お

茶を買おうとするが、水の方が無難だ

な、と水を二本買う。

それを早苗に渡して。

奥貫「どうぞ、お疲れ様です」

早苗「あ、どうもです、あ、お金」

奥貫「いや、これは、はい、大丈夫です」

早苗「…その自販機ってQUOカード使えま

すか？」

奥貫「え、いや、多分、無理だと思います…」

早苗「ですよね…（苦笑し）じゃ、いただきます
す。ありがとうございます」

と、水を飲む二人。

奥貫「QUOカードで買うんですか？ いつも」

早苗「（微笑し）上京祝いで、近所の人に何枚か

貰って。あんまりお金使いたくない主義なん
で」

奥貫「ああ、なるほど」

早苗「はい」

水を一気に飲みする早苗。

奥貫「あの、えっと…（名前…、と）」

早苗「（水を飲む手を止め）あ、虻川早苗です、
どうも」

奥貫「虻川さんは、上京ですよね…」

早苗「はい、上下左右の上に、京都の京で上京で
す」

奥貫「自分、上京諦めた身なんですよ」

早苗「あらま、それはなんで」

奥貫「…怖くて（と、苦笑し）」

早苗「怖い？」

奥貫「なんていうか、だって怖いじゃないで

すか」

早苗「なんていうか、だって怖いじゃないで

すか、って、全然理由になってないで

すよ」

奥貫「すみません…」

早苗「…あたし、センタクキの音ダメなんですよ。

あ、洗濯機って、センタクキって言いま

す？ センタクキって言います？」

奥貫「セン…タツキです」

早苗「じゃああたしもセンタクキで行きますね。あ

たしね、センタクキの音だめなんですよ」

奥貫「なんでですか？」

早苗「地震みたいだから」

奥貫「地震？」

早苗「はい、ずっとバタバタ言ってるし。た

まに揺れるし。上にハンガーとか置いてたら、八割方落ちてるし。はい。ホントに、怖いんですよ。無理なんですよ。あの、地震を連想させるもの。音もだし。てか、もうセンタツキそのものが、無理なんですよ」

奥貫「そうですか」

早苗「あたしの地元、あんまり揺れないんですよ。ホントに、地震大国日本か、つて感じで、あんまり揺れないんですよ。でも、東京ってすごい地震多いって聞いたことあって。ホントかどうか分からないけど、多分ホントで。だから、東京ってあたしの中では結構怖い場所なんですよ。あなたと一緒に」

奥貫「はい…」

早苗「でも、たまに、ありません？ すんごい怖いことしてみたい時。なんか、例えば、ジェンガです。あれ、崩れるとき、すんごい怖くないですか？ でも、

楽しいじゃないですか。ジエンガとか、

あ、あと、黒髭危機一髪とか」

奥貫「…」

早苗「そういう感じですか。たまに、怖いことしたくなる。それは、楽しいからです。楽しいだろうなって思ってるから、怖くてもしちゃいます。あたしの場合、ホント、そういう軽い、軽いノリで、上京してます。上京っちゃおうか！みたいな。まあ、でもそのせいで母親から変な所で降ろされたんですけどね。軽すぎたかつつて。上京っちゃいましよう、ぐらいにしとけば良かったかなって」

奥貫「虻川さんって、イマドキ、って感じありませんね」

早苗「え？」

奥貫「あ、いや、悪い意味じゃなくて」

早苗「デイスってます？（と、笑って）」

奥貫「いやいやいや、ごめんなさい、違います」

す」

早苗「はあい（と、笑って）」

奥貫「ああ…」

と、水を一気に飲みする奥貫。

早苗「待つてでもどうしよう、もう夜になっちゃい

ましたよ。上京、予定ではあたしもう東京

で東京の夜ご飯食べるはずですよ」

奥貫「ああ」

○コンビニ・店内・（深夜）

あまり人がいない店内で、お菓子を自分でい
る奥貫。

少し後ろに下がると、棚にぶつかり、痛つ、
と。

ハンカチで手を拭きながら、トイレから出て
くる早苗。

雑誌コーナーの方で、何かを見つけて、
すぐさま奥貫を探し、見つけ、駆け寄
り。

早苗「奥村さん奥村さん」

奥貫「あ、自分、奥貫です」

早苗「奥貫さんか、奥貫さん、見て下さい」と、

雑誌コーナーを指さす早苗。

奥貫「なんですか？」

早苗「あたしの人差し指のその向こうを真っ直ぐ見
て下さい」

早苗の人差し指のその向こうを真っ直ぐみる
早苗。

と、雑誌コーナーの中の、成人誌コーナ
ーで、老人（70）が立ち読みをしている。

早苗「あの歳で、ああいうの見るって、どんな人
生歩んできたんですかね」

奥貫「やめましようよ、そういう話（と、苦笑
し）」

早苗「あれ、奥村さんってそういう話ダメ系
ですか？」

奥貫「ダメとかそういうのじゃなくて、まず
奥貫です」

早苗「あのご老人をからかっているわけじゃない

いですよ。普通に、すごいなって、きっと
おうちには体の弱い奥さんがいらつしやって、
もう心の拠り所が、ああいうのしかないんで
しょうね」

奥貫「…介護ですか？」

早苗「ご老人がご老人を介護は出来ないでしょう」

奥貫「…」

早苗「奥村さん？ あ、奥貫さん？」

奥貫「出来ますよ」

と、レジに行つて、店員に差し出す奥貫。

早苗「どうしました？」奥

貫「いや、別に」

早苗「(店員に) 五十五番お願いします(と、タバ

コの棚を指して)」

奥貫「(タバコ吸うんだ、と)」

早苗「ごめんなさい、なんか変なこと言いまし
た？」

奥貫「全然、言ってません。普通の会話でし

たよ」

早苗「普通の会話からはなり得ない雰囲気になって

ますが」

店員「千二百五十円です」

奥貫、財布を出そうとするが、それよりも

早く、早苗が財布からQUOカードを出

して、取り出す。

奥貫「いえ、ここは自分が」

早苗「大丈夫です。あたしのQUOカードで払

いますから」

奥貫「そんなそんな…」

店員「申し訳ございません。当店はQUOカ

ードでの精算を受け付けておりません」

早苗「(え、と)」

奥貫「(あ、と)」

早苗「…」

奥貫「千二百円ですね」

店員「千二百五十円です」

○同・店前・（夜）

袋を持って出てくる奥貫。追うように出てくる早苗。

早苗「持ちますよ」

奥貫「大丈夫ですよ」

早苗「（え、と）」

早苗、奥貫の持つ袋の中に手を突っ込んで、タバコを取り出し。

早苗「どうぞ」

奥貫「いえ、虻川さんが」

早苗「あたしタバコ吸えないんで」

奥貫「じゃあなんで買ったんですか」

早苗「吸いたいかなくて思ってた」

奥貫「なんでですか、自分も吸わないですよ。

なんで自分吸わない上に、相手が吸う

かどうか分からないのに、五十五番

お願いしますとか言ったんですか」

早苗「あたし小さい頃から銭湯の靴箱とか、自転車の暗号タイプの鍵とか、全部五十五番なんですよ。好きなんです。で

もロッカーとか靴箱と違って、たまに

空いてないときとかあるでしょ。そう

いう時は、諦めて五十六番に入れます」

奥貫「そうですか」

早苗「あたしがご老人の性の部分に触れたのがまず

かったですか？ あれはあくまで個人の感想

なので…」

奥貫「ホントに、何もないです。大丈夫です。

ね、早くカプセルホテル行きましょう。

明日からバス乗り継いで行くんでしょ

う？ あ、銀行も行かないとなんでし

よ？ 通帳も鞆の奥から引っぱり出さ

ないとなんでしょ？ 暗証番号も思い出

さないとなんでしょう？」

早苗「暗証番号は今思い出しました。五五五五です。

五十五が二つですね」

奥貫「それはそれは…おめでとうございました」

早苗「カプセルホテル、空いてなかったらどうしま

す？」

奥貫「こんな誰もいないような夜中の街でカ

プセルホテルだけ満室なんてことないでしょ

う」

早苗「カプセルホテルって、満室、って言う

んですか？ まず第一カプセルなのに、

室なんですか？」

○カプセルホテル・フロント・（夜）

フロントスタッフの話をしている奥

貫と早苗。

!?

早苗 奥貫「満室」

フロントスタッフ「申し訳ございません」

早苗「なんか今日、すごい色んな人に謝られてる

気がするんですけど」

奥貫「この辺で他に泊まったりできる所とかって

…？」

フロントスタッフ「あいにくですが、この辺

りは…ちよつと…」

奥貫「（ええ、と）」

○同・前・（夜）

ベンチに座って、さつき買ったお菓子を食べている奥貫と早苗。

早苗「さつきのネットカフェであんなことし

ないで泊まっておけば良かったですね」

奥貫「ごめんなさい」

早苗「いや、大丈夫です。スッキリしたんで」

奥貫「…」

早苗、お菓子を一口食べる。

奥貫「自分、おばあちゃん子で…」

早苗「…ん？」

奥貫「お父さんとお母さんは自分が八歳の頃に離婚

して、お母さんとずっと暮らしてて。自分

が小学六年生の時に、お母さん、乳がんで

死んじゃって」

早苗「ちよ、ちよっと待って下さい。なんですか、

いきなり。良いですよ、そんな話しないで」

奥貫「これ以上スッキリさせてあげたいし」

早苗「あ、さつきの、コンビニ、のやつです

か？」

奥貫「はい」

早苗「やっぱなんかあったんじゃないですか」

奥貫「お母さんが死んじゃってから、自分、

おばあちゃんとおじいちゃんの家で暮

らしてて。 中学、 高校、 と。 たまに家

にお父さん、 まあ、 お母さんの元夫が、

来て。 自分と、 遊んだり、 お小遣いく

れたりして。 でも、 おじいちゃんとお

ばあちゃんは、 お父さんのことが、 あ

んまり好きじゃなくて。 だから、 どん

どんお父さんは自分に会いたくても、 会

いにくくなって、 会う数も減ってきてま

した。 自分はそれでもおばあちゃんと

おじいちゃんからは離れませんでした。

おばあちゃんが、 ちょっと、 危な かった

から」

早苗「… 危ない？」

奥貫「おばあちゃん、 どんどん、 帰りが遅くなっ

て。 いつも近所の人を連れて帰

つてきてくれて。たまに、自分の名前も出てこなくて、自分、佑真って言うんですけど、佑真って名前がおばあちゃんの口から出ることが、ホントに、極端に、少なくなつて。病院に行こうにも、おばあちゃんに変な不安を作りたくないって、おじいちゃんに連れて行かなくて。自分が連れて行っても良かったんですけど、おじいちゃんが言う以上、連れて行けなくなつて。そしたらある日、おばあちゃんが、夜になつても帰つてこなくて。それも、夜って、ただの夜じゃなくて、深夜です。深夜。おじいちゃんと必死に探し回ったら、おばあちゃん、帰れなくなつて、フラフラ外歩き回つて、それも冬なのに、薄着で。どんだん体力も落ちてきて、夜の暗い道で、足踏み外して、神社の階段転がり落ちて、右手、右足、あばらの骨を折つてました」

早苗「え…」

奥貫「それから、おじいちゃんは、おばあちゃんを一步も家から出さず、ずっと一人で、必死に、介護、してきました」

早苗「…」

奥貫「そんな生活が一年続いて、自分も、高校に進学して。おばあちゃんは痩せ細って、おじいちゃんはずっと、おばあちゃんのためだけに、やりたいこともいっぱいあって、会いたい友達もいっぱいいて、釣りたい魚もいっぱいあったのに、それら全部我慢して、おばあちゃんのためだけに生活してきた。そして、おじいちゃんが、病気になるまで、すんなり死んじゃって。数ヶ月後には、おばあちゃんも後を追うように死んじゃって。でもきつと二人は向こうでちゃんと会って、幸せにしてるはずですから、それはそれで、良かったんだろうな、って」

早苗「…そう、なんだ」

奥貫「なんかごめんなさい、さっきはそれをちよつと思ひ出しただけです。ホントに、ホントのホントで、それだけです」

早苗「そっか、なんかごめんなさい」

奥貫「おばあちゃんのお葬式で、お父さんが来て、おばあちゃんの介護がどうだったとかおじいちゃんが可哀想だったとか、言い出して、自分が爆発しちゃって。それで、お父さんとも前以上に会いにくくなって。もう、これは東京行こうって、思って、上京する準備したんですけど、怖くてやめて…何年も経って、今です」

早苗「…」

奥貫「話したのは、自己中な、独り言です。自分、もう絶対人の独り言に対して文句言えなくなりましたね（と、苦笑し）聞かなかったことにしてください。もう、忘れて下さい」

早苗「教えてくれてありがとうございます」

奥貫「こんな、独り言で。スッキリしてくれまし

た？」

早苗「ええ、とても」

奥貫「それはそれは」

早苗「なんかごめんなさい」

奥貫「全然です」

と、奥貫、お菓子を食べる。

早苗「奥貫さん」

奥貫「やっと覚えてくれましたね」

早苗「…免許、って持ってます？」

奥貫「え？」

早苗の視線の先には、レンタカー屋。

○レンタカー屋 外・（深夜）

運転席に奥貫。助手席に早苗。エン

ジンを入れる。

奥貫「入った」

早苗「ホントごめんなさい」

奥貫「全然大丈夫です。行けるところまで、

行ってみましょう。明日までに返せば

なんで。行けるところまで」

早苗「よろしくお願いします」

奥貫「ネットカフェのお詫びです」

早苗「スッキリしたから良いのに…（と、笑って）」

車が発進する。

○国道・（深夜→朝）

奥貫の運転する車が走っていく。

早苗のスマホから陽気な音楽が流れ、それを

二人で口ずさみながら、走っていく。

街は少しずつ明るくなり、朝になりかけたところ

で、

早苗「この辺りで一旦休憩しましょう」

奥貫「自分、その辺で寝ますね。虻川さんは車内

で、どうぞ眠って下さい」

早苗「奥貫さんが、車内で」

奥貫「いやいや、自分は大丈夫です」

早苗「じゃあ、両方車内で…」

奥貫「それはそれは、ダメです。なにもしま
せんが、なにかあつてはいけないの
で！ なにもしませんがあ！」

早苗「（笑って）」

車が広場で停車する。

奥貫「どうぞ、ごゆっくり」

運転席から奥貫が出てきて、段差に腰掛ける。

その様子を車内から見つめている早苗。

じつと奥貫の横顔を眺め、微笑み、ス

マホを取りだし、写真を撮る。

早苗「さつき撮れなかった分ですよ…（と、微笑

む）」

× × ×

いびきをかきながら、助手席で眠って
いる早苗。

スマホのアラームが鳴って、目覚める。時間は、
朝九時。

と、思い出したように外を見ると、小

雨が降っている。

段差で、奥貫がフードを被り、寒そうにしている。

早苗「えっ！」

すぐに車から降りて、自分が来ていたパーカーを脱ぎ、奥貫に被せてあげる。

奥貫「あ、いや、大丈夫です」

早苗「乗れば良かったのに……」

奥貫「寝てたから……」

早苗「良いですよ、早く乗って」

と、車に奥貫を戻し、自分も戻る。

早苗「なんかごめんなさい」

奥貫「いえいえ……こちらこそです」

早苗「いえいえ……」

奥貫「……なんか、自分たち、昨日の夜から、ずっと謝ってばかりな気がしてます」

早苗「ホントですよね……」

奥貫「虻川さんって、謝ったりしますか？」

早苗「何がですか？」

奥貫「いや、謝って解決したい派ですか？」

それとも、意地でも謝らない派です

か？」

早苗「んー、謝ってパッパッって解決したい派かな」

奥貫「そうですか」早

苗「なんで？」

奥貫「いや、全然、あの、沈黙が出来るよ、気ま

ずくて…（と、苦笑し）

早苗「ああ、なるほどなるほど」

奥貫「結構話してて、同じ車乗って、一緒に行動

してますけど、会ったの昨日っていうの凄

いですね…（と、笑って）

早苗「若気の至りだよ（と、微笑し）」

奥貫「虻川さんって、良い匂いしますね」

早苗「え？」

奥貫「あ、ごめんなさい！ 変なこと言いまし

た！ でもそういう変な意味は全くないで

す！」

早苗「ああ、大丈夫大丈夫」

奥貫「（恥ずかしそうにしている）」

早苗「…ずっと思ってたんですけど、奥貫さ

んって、あたしの昔の友達の匂いがし

ます」

奥貫「え？」

早苗「昔、幼稚園のときに、卒園式の三日前に、

遊具から落ちてあご怪我して、それっき

りずっと会ってない友達がいるんです。

あたしその子とすんごい仲良かったんで

すけど、それっきりで。だから、奥貫

さんと会ってたら、ずっとその子とい

気分です（と、苦笑し）」

奥貫「なんかごめんなさい」

早苗「謝ることじゃないですよ（と、笑って）」

奥貫「…ドラマとかなら、自分がその友達でしたっ

て言っただけで感動的な感じになるんでしょうけど、

なんせ昨日会ったところなんでね…」

早苗「（笑って） どう頑張っても感動的な展

開にはならないね（と、苦笑し）」

奥貫 「（笑って）」

早苗 「……ここどこだろ」

奥貫 「すごい遠くに、スカイツリーが見えます。

もう、刺繍針くらい細く見えますけど、あれ、スカイツリーです」

早苗 「おお、あれがちゃんとツリーになったときが、上京したときですね」

奥貫 「そのときには、東京ガールですよ」

早苗 「…本当にありがとうございます」

奥貫 「あ、謝罪じゃなくなった」

早苗 「（微笑み）」

奥貫 「行きましょうか」

早苗 「はい、よろしくお願いします」エン

ジンを入れる。

車が発発する。

○国道・（朝）

子供が公園でシャボン玉を吹いて遊んでいる。

そのシャボン玉が、二人の乗る車を包

み込むように舞う。

早苗と奥貫、綺麗だな、と。

○食堂・前・（昼）

車が停車している。

○食堂・店内・（昼）

客で賑わう昔ながらの食堂。

早苗と奥貫の元に、定食が運ばれてくる。

店員「豚汁定食です」早

苗「美味しそう」

店員「デートでこんな食堂来るってどんだけ何も無い

んだこの街は！（と、笑う）

奥貫「あ、いや、デートじゃないです！」

早苗「（笑って）」

店員、去り。

奥貫「失礼な店員さんですね」

早苗「（割り箸を差し出し）美味しそうですよ。

今まで見た豚汁定食で一番美味し

「そんな豚汁定食です」

奥貫 「(割り箸を受け取り) あ、どうも」

早苗 「いただきませう」

奥貫 「失礼します」

早苗 「え? (と、半笑いで)」

奥貫 「正面から、自分の食べる姿を見せつけてしま
ってるワケですから」

早苗 「なんですかそれ(と、笑い) いただき
ますって言いましょう(と、微笑む)」

奥貫 「はい、いただきます」

早苗 「良く出来ました(と、微笑し)」

「食べ始める二人。」

早苗 「(何か思い、奥貫の顔色を伺う)」

奥貫 「(早苗と同じ事を思い、早苗の顔色を

伺う)」

○同・前・(昼)

出てくる奥貫と早苗。店員

の声「毎度あり」

車の方へ歩きながら。

早苗「どうでした？」

奥貫「お、美味しかったですよ？」

早苗「嘘ですよ。あたしすんごいまずかったです

よ」

奥貫「虻川さん（と、笑い）」

早苗「あれ、って思いましたよ」

奥貫「まずはなかつたですよ？ でも」

早苗「でも？」

奥貫「美味しくはなかつたですね（と、苦笑し）」

早苗「ほら〜」

車に乗り込み。

奥貫「でも、食べれましたよ」

早苗「お腹すいてなかつたら食べませんでしたね。

残しましたね。絶対に」

奥貫「ああいうのって、お店の人気づいてるんです

かね…？？」

早苗「何がですか？」

奥貫「味、悪いってこと」

早苗「どんだん口が…」

奥貫「悪くなってますね…すみません」

早苗「臭くなってます（と、笑いながらふざけて）」

奥貫「ええー！（と、笑いながら焦り）」

早苗「（笑いながら）嘘です嘘！ 落ち込ま

ないで！ 大丈夫う！」

奥貫、笑いながら落ち込むフリをして、早苗を逆に焦らせ、二人でふざけ合う。早苗、そんな今が楽しく感じる。

○スクランブル交差点（昼）

信号が変わり、小学生が走りながら横

断歩道を渡っていく。

会社員は昼休憩なのか、和気藹々と話

しながら渡っている。

奥貫、ハンドルに手をかけながら、信号が

変わるのをじっと待っている。

早苗「…奥貫さんって、彼女いたことありますか？」

奥貫「なんですか」

早苗「…信号待ちクエスチョンの時間です」

奥貫「また始まりましたよ虻川さんの訳わか

んないノリ（と、苦笑し）」

早苗「どうですか？」

奥貫「ないですよ」

早苗「（驚き）一度も^{!?}」

奥貫「一度でもあつたらあるって言ってます

よ」

早苗「好きな人は？ いたことあります？」

奥貫「…好きな人はいましたよ」

早苗「どんな人ですか？」

奥貫「言わないとダメですか？」早苗

「ダメです」

奥貫「えー」

早苗「早く！」

歩道の信号がチカチカ点滅し始めて。

奥貫「清楚系です。クラスの、マドンナの。

高校の時ですけどね。でも、自分の、親友

に、取られました」

早苗「うっわ、あらあらあら…」

奥貫「でもね、好きな人って絶対作っても成

功しないじゃないですか。逆に好きだからこそ、成功しないんですよ。誰でも良くて、相手にどう思われても良いとかだったら、とっくに上手くいって、今は幸せですよ、きっと」

早苗「絶対奥貫さんのこと好きになる人いると思いますよ？ だって現にあたしも、もしね、もし、彼氏だったら面白いかもって思いましたもん。昨日あったばっかりのあたしで思うんだから、きっと思う人いっぱいいますよ」

奥貫「ないですよ」
信号が赤に変わった。もうすぐ車道側が青になり、出発できる、と思い、ハンドルを握る奥貫。

と、突然奥貫の唇にキスをする早苗。すぐに元に戻る。

奥貫「（え、と）」

早苗、恥ずかしいのか、何もなかった

ように窓の外を見つめる。

車道側の信号が、青に変わった。びっ

くりして動けない奥貫。

後ろに並んでいた車から、クラクションが鳴

らされ、我に返り、走り出す。

○街中・（昼）

スカイツリーが少しずつ近くなってきたのが分かる。

○ホームセンターの駐車場・（夕）

走ってきた車が急に止まり、駐車場の方へ入って行く。

早苗、窓の外のその景色に、え、と。

早苗「なんですか？」

奥貫「ここで降りて下さい」

早苗「なんでですか」

奥貫「いえ…ちょっと」早

苗「疲れましたか？」

奥貫「いや、そんなんでは…」

早苗「…ごめんなさい」

奥貫「いえ…」

早苗「変なことしました。本当にごめんなさい」

奥貫「いえいえ…」

早苗「降ります。失礼なこととして本当にごめんなさい」

い

と、後部座席から荷物を取って、降りよう

とした早苗の手を掴む奥貫。

早苗「え」

奥貫「あ、違います。自分が、ごめんなさいです。

申し訳ないことをしたので、もう、降りて

もらった方が良くはなつて

…だから、あなたが責任感じるのは違いま

す」

早苗「え？」

奥貫「ああいうのって」

早苗「やめてください恥ずかしいです」

奥貫「ああいうのって、普通は自分からするべきで

すよね。男の方から。それを女

性に、させてしまったのが、申し訳な

いです」

早苗「違いますよ。あたしが勝手にしたことですか

」

降りようとする早苗。

もう一度、手を握り、今度は奥貫の方から

キスをする。

早苗「ごめんなさい…そんな無理矢理じゃなくて良

いです。責任感じて、自分もしなくちゃっ

て思ってるなら、大丈夫ですから」

奥貫「違います」早

苗「…」

奥貫「自分、ホントは、北海道の人間です」早苗

「…は？」

奥貫「雪ばかりの」

早苗「はあ…（と、よく分からないが）」

奥貫「自分は死のうとしてました」

早苗「はい？」

奥貫「自殺しようとして、こっちの方に来ま

した」

早苗「なんですか、それ」

奥貫「バイトしてて。北海道の、ホント端っこの方にある、ホント小さな、ホントに小さいファミレスなんですけど」

早苗「ファミレス…」

奥貫「自分、こんな性格だから、接客業に向いてないって、それで厨房の、皿洗いに回されて、そこで、他のバイトの人とか、社員さんとかから、ずっと罵られて、こんな自分、生きてる意味ないじゃん、って」

早苗「そんなことないです」

奥貫「それで、どうせ死ぬなら、一度行こうとして怖くなった東京に行ってみようって。それで、適当に死のうって、そう思っていました」

早苗「そうですか…」

奥貫「免許はすぐ取ったんで、車さえあればどこでもいけるって、それで、おじい

ちゃんが使ってた古い車に乗って、東
京を目指したんですけど」

○回想・路上・（夕）

おじいちゃんが使っていた古い車に乗ってや
ってきた奥貫。

車を路肩に停めて、降りてきて、電話ボツ
クスの方へ向かう。

○戻って・ホームセンターの駐車場・（夕）早苗の
目を見て、手を握り、話をしている奥貫。

奥貫「最後に、お父さんに電話しとこう、って。
携帯からすれば良かったんですけど、なんか
そこは、記録に残したくないから…お父さ
んの携帯にずっと自分の名前が記録されるの
が嫌だから、ひたすら公衆電話を探して、
やっと見つけて」

○回想・路上・(夕)

電話ボックスに入り、携帯からお父さんの電話番号を出して、電話をかける奥貫。

奥貫の声「でも…」

受話器からは、「おかけになった電話は、現在使われておりません」が聞こえる。

残念そうに、電話ボックスから出てくる奥貫。ふと見ると、チャラチャラした集団が、車をいじっている。

奥貫「え…」

一人の青年が運転席に乗り込んだ。中の荷物が雑に投げ捨てられる。

奥貫「ちよ、ちよっと…」

集団がこちらに奥貫に気づき、すぐさま車に乗り込み、そのまま走っていく。挑発するように窓から顔を覗かせ、手を振る一同。

集団「イエーイ！」

奥貫の声「結局自分は何もできなくて、自分を苦し

めるものは、全部、自分が元凶なんだ、

って。自分が接客業に向いてないせい

で、自分に力がないせいだ……」

何も出来ず、ただ捨てられた荷物を拾うこと

しか出来ない。

その中に、洗濯ばさみもある。

○戻って・ホームセンターの駐車場・（夕）早苗の

目を見て、手を握り、話をしている奥貫。

奥貫「それで、近くのネットカフェに行ったら、

そこで、あなたの声が聞こえて」

早苗「……」

○回想・ネットカフェ・個室・（夜）

鞆の荷物を広げている奥貫。

適当に洗濯ばさみを置く。

横から聞こえる早苗と店員の話し声を

聞いて、…。

奥貫の声「誰でも良かった。ただ単純に、誰

かに、自分はヤバイヤツだ、って、

キモいやつだ、って、否定してほ

しかった。死んでも良い奴だ、っ

て、生きてる価値ないやつだ、っ

て」

○戻って・ホームセンターの駐車場・（夕）早苗の

目を見て、手を握り、話をしている奥貫。

奥貫「だから、嫌われるように、しつこく、

嫌われるように、あなたに話しかけた。

でも、上手くいかなくて、いつも通り

の自分で。なんでもない人で…それで

もあなたは、優しくて。あなたといた

ら、良いかも、って。ここにいても良

いかも、って。もう少し頑張ってみて

も良いかも、って」

早苗「…」

奥貫「良い夢見させてもらいました」

早苗「奥貫さん」

奥貫「頑張ってください、東京生活」

早苗「死んじゃダメ」

奥貫「良いかも、生きてても良いかも。そう思え

ただけで、もう十分ですから」

早苗「お願いだから考え直して」

奥貫「…さようなら」

と、早苗の手を握るのをやめる奥貫。早苗、

すぐさま奥貫にキスをしようとするが、奥貫

はそれを拒む。

奥貫、早苗を軽く突き飛ばしてしまい、早苗は

転がるように、車から降りる。

奥貫「ごめんなさい」

早苗「…」

奥貫「忘れ物ないですか？」

早苗「…」

奥貫「ありがとうございました」

早苗「待って」

奥貫「ダメです。あなたはこれから第二の人

生を歩むんだから。無視して、忘れて」

早苗「無理よ！ あなたの話は全部覚えてる

し、あなたの顔はずっと忘れないし」

奥貫「全部、自分の、独り言なんで」

早苗「…」

奥貫「では」

と、扉を閉める奥貫。

車は、早苗を残して、去って行く。

早苗、立ち上がり、切なく思いながら

も、必死で。

早苗「ありがとうございます！」と、

頭を下げる。

そこに真っ黒な軽自動車がやってくる。開いた

窓から顔を覗かせたのは、母

夏子。

夏子「…あんた、なにしてんの？」

早苗「え？」

夏子「変な所で降ろしちやって申し訳ないなって思

ったから東京までの道ひたすら

探したのよ。なんでもっと変なところに居んのよ」

と、突然泣き出す早苗に。

夏子「え、なにになになに」

早苗、声を上げて、泣く。

夏子「なに！」

○数ヶ月後・アパート・前・（朝）

『数ヶ月後』のテロップ。

○同・早苗の部屋（朝）

荷物をリュックに詰めて、部屋を出て行く早苗。

○同・前・（朝）

階段を降りてくる早苗。

夏子が車に乗って、待っている。

夏子「なんでそんなに荷物あんのよ」

早苗「だって…」

夏子「何泊するつもりよ」

早苗「絶対すぐ終わるから！」

夏子「ホントに？」

早苗「早く早く」

車が出発する。

○高速道路　・（昼）

真つ黒の軽自動車走っていく。

早苗「とりあえず潰しまくるよ」

夏子「三日で見つからなかったら帰るからね」早苗

「はいはい」

○北海道・札幌時計台辺り・（夜）

夏子が運転する車が通り過ぎていく。

○ファミレス・前・（夜）

車が停車して、夏子と早苗が降りてくる。

夏子「そんな一発目であたるなんてことないわよ」

早苗「そりゃね」

○同・店内・（夜）

入ってくる夏子と早苗。

店員の声「いらつしやいませ」

と、 駆け寄ってきた店員に。

早苗「あの…こちらに、 奥貫佑真さんという方は
いらつしやいませんか？」

店員「奥貫佑真ですか？」

早苗「はい」

店員「いますよ」

早苗「え？」

店員「今呼んできますね」

早苗「はい…」

夏子「え、え、 ちょっと待って」

早苗「…」

と、 やってくる男性。

早苗「（え、と）」

それは、 紛れもなく奥貫。」

早苗「…」

奥貫「はい（と、 笑顔で）」

早苗「…」

奥貫「…」

早苗「…感動的な展開、ありがとうございましたね」

奥貫「ですね（と、涙を堪えながら）」

完